

モダニズムの 旧寮を残して

会社員

(神奈川県相模原市 72歳)
母校の東京女子大に残る大正から昭和初期にかけてのモダニズム建築の建物が解体の瀬戸際に立たされています(7月3日夕刊)。
老朽化や手狭なキャンパスが解体の理由だそうです。壊されそうなのは、機能や合理性を重視したチェコ生まれのアントニン・レーモンドが設計した個室寮(旧東寮)です。

レーモンドの建物は9棟残り、最も古いのが1924年に完成した旧東寮です。私はここで学生時代の2年間を過ごしました。

コンクリート造りの狭い個室を当時は冷たく感じながら、中庭の緑を眺めたものです。今年6月に訪れる

2007年8月5日 朝日新聞朝刊「声」欄

と、等間隔で並ぶ窓枠が木陰を映して柔らかな表情を見せていました。窓枠や水平に突き出した玄関のひしはシンプルですが、陰影の美しさを感じさせます。

新技術だった鉄筋コンクリート造りで耐震の考え方が採り入れられました。旧東寮は完成の間際に関東大震災に遭遇しましたが、全く崩れなかったそうです。

解体は今月中に始まる計画で、胸のつぶれる思いです。大学当局に延期と再検討を望みます。